

及川ふみ

戸倉ハル先生の訃報に接し、哀惜と淋しきで一ぱいであった。祭壇に飾られたありし日の遺影をながめてその感が一入こみあげてきた。

思えば、戸倉先生とは公私ともに、ながい間のおつきあいであった。そのおりおりのいろいろのことがつきつきと偲ばれてくる。まず東京牛込揚場町にあった東京女子高等師範学校の寄宿舎生活の学生時代のこと、銘仙餅の和服に袴ばきのさっそうたる姿がはじめに浮ばれてくる。

ご卒業後しばらくたった大正十三年頃、高知県出身の附属幼稚園の先生を通して、戸倉先生が、しゃぼん玉のうたの振り付けをしたので、附属幼稚園のお子さんにやらせてみたいからの申しこしがあった。

もちろんこれをよろこんでおうけしたのであったが、今から思いたすと、その頃から戸倉先生はしきりに幼児のうたとゆうぎの研究をはじめられていたのであった。

その翌年の大正十四年の夏から、附属幼稚園での日本幼稚園協会主催の講習会にご出講を願ったのである。

それから昭和四十二年の夏まで、長い長い期間実に四十有余年間、幼児の教育に教おおい「うた遊び」のご指導をいただいたのであった。

東京女高師時代、体育館が会場の頃、講習参加者多数のために、二階の参観席など落ちないかと主催者として講習開催中、心配しつつげたことなども今は思い出での一つになつてくる。

その後、お茶の水女子大学の大講堂に会場を移しても年々の講習参加者の超多数のため、はちきれんばかりの壮観を呈した。この盛況にはいつも戸倉先生もご満悦であった。

こうして日本全国津々浦々の地域にわたって戸倉先生の「幼児の創造性を培ううたとあそび」で風靡したので

戸倉ハル先生を悼む

あろう。

このすばらしい業績は今更よく筆舌では尽しがたいのである。ここに改めて戸倉先生に幼児の教育に関係する多くのものが深く感謝するところである。

戸倉先生には私個人としてもそのご温情をおうけした。地方での講習会にご一しよに出かける機会も度々あった。いつもいたわられて往復の汽車中などで何くれとなくお世話になった。座席のこと、荷物の始末、また宿につけば部屋のこと、食事のことお風呂のこと細々と妹分のお心づかいをありがたくお受けしたのであった。

その時々のお話はいつも郷里四国においでになるお母さまのことであった。「満州へ出張する時など、わざわざ私の好きなお弁当を作って岡山駅までもって来てくれるのですよ。親はありがたいですね。親を大事にしなればなりませんね」としみじみと語られるのであった。また戸倉先生はその頃和食米飯がおすきのようであった。旅行中車窓から田園の風景をながめながら、「私はいつも思うのですよ、私の一年中食べるお米が田園の広さにすればどの位の大ききかな」など話されたことなども印象に残っている。いろいろの話のあい間にはいつも詩集をおよみになっていたようであった。

この近年はお互にお茶の水の学校をはなれていたのです、戸倉先生とは一年に一度夏季の講習会でお目にかかるのを楽しみにしていた。

それが思いがけなくも昭和四十二年の夏の講習会が最後となってしまった。大講堂の壇上で、なつかしいセーラー服の戸倉先生のお元氣なお姿であった。

ここに戸倉ハル先生を追憶して、みたま安かれと切に祈るばかりである。